

## 第3章 イギリスの教育課程

### 3-1 イギリスの教育制度の概要

イギリスは正式には「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国 (United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)」と呼ばれ、イングランド (England)、スコットランド (Scotland)、ウェールズ (Wales)、北アイルランド (Northern Ireland) から構成されており、それぞれが教育をはじめとする内政において強い独立性をもっている。したがって、各地域において異なった教育制度がとられているが、ここでは人口の大部分を占めるイングランドの教育制度をもとに同国の教育について述べる。

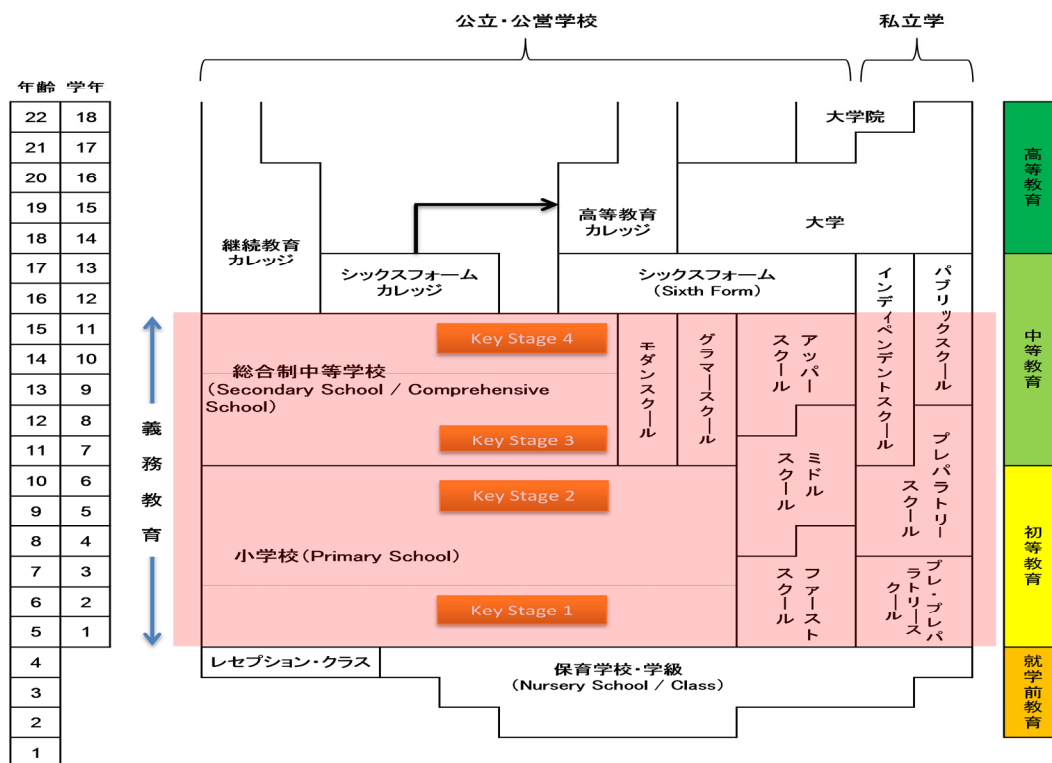
義務教育は5歳から15歳までの11年間で、初等教育が6年、中等教育が5年となっている。初等教育は一般にプライマリー・スクール (Primary School) と呼ばれる学校で行われ、教育課程は最初の2年間 (Key Stage 1: KS1) とその後の4年間 (Key Stage 2: KS2) の二つに分けられている。多くのプライマリー・スクールではKS1とKS2を継続して行うが、なかには前半をインファント・スクール (Infant School)、後半をジュニア・スクール (Junior School) として別々の学校で行う地域もある (プライマリー・スクールについては以下、「小学校」と呼ぶ)。

中等教育は選抜試験のないコンプリヘンシブ・スクール (Comprehensive School) で行われるのが一般的であるが、これ以外にもかつての伝統を引き継ぐ選抜制のグラマー・スクール (Grammar School)、モダン・スクール (Modern School) や一部で入学年齢や修学年限の異なるファースト・スクール (First School)、ミドル・スクール (Middle School)、アッパー・スクール (Upper School) がある。

義務教育である5年間の中等教育課程を修了した生徒が上級学校へ進学するために学ぶ2年間の課程をシックスフォーム (Sixth Form) と呼ぶ。中等学校に併設され中等教育に組み込まれているものと、独立した学校として設置されているものがあり、後者をシックスフォームカレッジ (Sixth Form College) と呼んでいる。一方、義務教育終了後に職業教育を中心に多様な課程を提供するのが継続教育 (Further Education) である。それらの教育機関を継続教育カレッジと呼んでいる。ここではフルタイムとパートタイムの課程があり、一定の職業経験を積んだ後にパートタイムで学ぶ学生もいる。継続教育は一般的には中等教育レベルと見なされているが、高等教育レベルを提供する機関もある。義務教育の最終学年 (Key Stage 4: KS4) で行われる GCSE (General Certificate of Secondary Education) 試験の結果は、その後の進路を選択する際の基本的な資格となる。

高等教育機関には大学と高等教育カレッジがあり、後者は美術、音楽、演劇などを専門的に学ぶ機関で学位が取得できる。学位取得のための修業年限は3年が基本であるが、各種の専門資格を取るための短期コースも準備されている。他方、大学進学を目指す生徒はシックスフォームの1年次修了時に AS レベル試験 (Advanced Supplementary Level Examination) を、2年次修了時に A レベル試験 (Advanced Level Examination) を受けることとなり、その成績をもとに進学先の大学が決定される。

初等・中等教育学校には公費や国庫補助を受けずに運営されているインデペンデント・スクール (Independent School) というものもあり、イートン校をはじめとする有名なパブリック・スクール (Public School) やプレパラトリー・スクール (Preparatory School) などが含まれる。



イギリスの学校系統図

出典：佐貫浩『イギリスの教育改革と日本』高文研、2002年及び教育省へのインタビューより

イギリスでは、1988年以來ナショナル・カリキュラムが導入されているが、現行カリキュラムは2002年の教育法がその設定基準となっている。ナショナル・カリキュラムはすべての公費維持運営学校（アカデミー、フリースクールは除く<sup>1</sup>）に適用されるが、それが規定する範囲は学校カリキュラムの50%であり、残りの50%は各学校の裁量に委ねられている。同国のナショナル・カリキュラムの実施において、法的には授業時間数を規定することは禁じられているが、KS1で週21時間、KS2で週23.5時間、KS3で週24時間、KS4で週25時間、また体育・スポーツに関してはKS1-4ともに最低週2時間、さらに中等学校では宿題に要する学習時間として、7-8学年で毎日45-90分、9学年で60-120分、10-11学年で90-150分が推奨されており、各学校はそれをもとに授業時間数を設定している。

同国でのナショナル・カリキュラムの改訂サイクルは特に決まっていない。現在、ナショナル・カリキュラムの改訂作業中で、2014年度より新しいナショナル・カリキュラムが施行される計画である。

（調査チーム）

<sup>1</sup> アカデミーとは、ブレア政権下において荒廃した公立校に外部から新しい財力を投入して再生させる計画で2000年に開始された教育改革によって創設された学校種で、地方自治体から基金をもらう従来の公立校とは違い、国から基金を受け、スポンサーを募って開校する点に特徴がある。またフリースクールは2010年に誕生した連立政権下において推進されている学校種で、その設置は公的機関ではなく、民間などが自由に設立することができる公費で維持される学校を指す。

### 3-2 イギリスの教育課程 はじめに

イギリス（ここではイングランド）では、現在、2014年9月からの実施を目指して、ナショナル・カリキュラムの見直し作業の途上にある。現政権は、2014年2月7日にキーステージ1～3（第1学年～第9学年）までのナショナル・カリキュラムの草案を発表した<sup>1</sup>。今後は約2か月の公開諮問を受けた後、最終案をまとめる模様である。またキーステージ4（第10～11学年）については、最終段階である16歳時に受ける外部試験のGCSE試験のありかたが、その内容を大きく規定するが、それについても政府は大胆な改革を表明しており、同じく本年2月7日に、それまでの公開諮問の結果をまとめた文書を発表した<sup>2</sup>。今後は、2015年9月からの対応する授業の開始に向けて詳細が決定されることになる。

本稿は、以上の文書および2012年9月の本研究国際研究班のイギリス現地調査による政府関係者、ナショナル・カリキュラム見直し作業の専門家調査団、研究機関等への聞き取り調査により得られた情報をもとに、新しいナショナル・カリキュラム体制下での「能力やスキル」のありかたについて、その展望をまとめるものである<sup>3</sup>。

### 3-3 スキルを超えて

#### 3-3-1 学校・教師に自由と自律性を与え、世界標準の教育を目指す

2010年5月に前労働党政権から政権を奪取した保守党・自由民主党の連立政権は、学力の国際比較テストにおける結果に強いこだわりを見せている<sup>4</sup>。政権獲得後、それまでのナショナル・カリキュラムの全面的な見直しを決定し、改訂作業に着手した。ナショナル・カリキュラムは、学力の国際比較テストで高い得点を出している国・地域をよく研究したうえで、（国際競争に負けないように）高い水準を期待する内容を示すこととした。

英語、数学、理科については、教えるべき教科内容を詳細に定め、それ以外の教科については、簡単な基準を示すにとどめている。そのようにして、国が定めるカリキュラム基準は、学校のカリキュラム全体の50%程度にとどめ、それ以外については、各学校・教師の創意工夫に任せるというものである。もともとイギリスでは、最良のカリキュラムは、学校において決められるという考え方を持っている<sup>5</sup>。

学校の自由と自律性をさらに強くするための制度改革は、すでに始まっている。2010年アカデミー法により、公営の学校でありながら、地方当局の管理下から離れ、中央政府から直接補助金を得ることができるアカデミー（新たに設立する場合はフリースクールと称す）は、予算の優遇措置が得られるだけでなく、ナショナル・カリキュラムに従う必要がない。したがって、当該学校や教師は大きな自由と自律性が与えられるのである。こうした学校は、既にイングランドの全中等学校の50%以上を占めている。しかしながら、それらの学校においても、教育の結果についての責任は問われているのでナショナル・カリキュラムの全国テストやGCSE等の外部試験等により教育達成度は監視されるのである。要するに、結果が出ていさえすれば、どう教育するかは自由であるということになる。

### 3-3-2 「秘密の花園」から「オープン・ガーデン」へ

以上のように、学校・教師に自由と自律性を与えるが、ただし、各学校がどのようなカリキュラム内容を展開しているかは、一般に公開することが義務付けられた<sup>6</sup>。イギリスにおいては、伝統的に各学校独自のカリキュラム開発が自明となっており、特に 1988 年教育改革法によりカリキュラムの全国基準であるナショナル・カリキュラムが導入される以前は、とりわけ初等学校において、学校のカリキュラムを決める際に教師たちの裁量が大きく、自由な実践が展開されていたことから、まさに「秘密の花園」と称されていた。その後ナショナル・カリキュラの導入や視学官による学校監査制度の導入により、学校内の教育については、それまでのように全く見えてこないという状況ではなくなったが、それでもなお、ナショナル・カリキュラムが大綱的な基準であることや学習時間を定めることを禁じているなど、各学校での教育内容は外部からはわかりにくい面があった。今次の教育内容の公開の義務化により、各学校のカリキュラム内容については、ホームページから閲覧できるようになった。まさに「秘密の花園」は「オープン・ガーデン」になったのである。

### 3-3-3 英数理の教科知識の重視とスキルおよび教科以外の領域の発達

イギリスにおいては、過去 20 年来、スキルの育成を重視していた。改訂前のナショナル・カリキュラムでは、〈コミュニケーション〉〈数字の活用〉〈情報技術〉〈他者との協働〉〈自分の学習と成績の向上〉〈問題解決〉を 6 つのキー・スキルと定め、さらに〈思考スキル〉を加えたが、それらはナショナル・カリキュラムの各教科を通して学ぶべきものとされていた。

ところが現政権により改訂されつつあるナショナル・カリキュラムは、特に英語、数学、理科について教えるべき教科知識を手厚くした形で示し、その他の教科については、上記 3 教科と比して格段に簡略化した形で提示する方向にある。これは、子どもたちが何を学ぶべきかを知識として明らかにするのが重要である事が、国際比較テストの結果、明らかになったことによる。すなわち、ナショナル・カリキュラムにおいては知識の構造を示すことが重要であり、生徒をどう動機づけるかなどについては示すべきではなく、それらは各学校・教員が考えるべきことであるという考えに基づいている<sup>7</sup>。また、科学の発展による一部の大きな変化を除き、ナショナル・カリキュラムで示すべき教科知識のほとんどは、20-30 年と変わらないものであるべきとの考えに基づいている。

しかしながらそれは知識のみを教授すればよいと考えているわけでもない。今次の改訂の在り方の方向性を示すものとしてナショナル・カリキュラム見直し作業の専門家委員会（座長ティム・オーツ）により 2011 年 12 月に提示された『ナショナル・カリキュラムの枠組み』には、以下の記述がある。

*「教科の知識を重視・強調するあまり、教育の発達的な側面の方を軽視する教育者がいる。他方では、現代社会の知識の変化は早く、『学ぶ方法を学習することこそが最優先されるべきである』と主張して、スキル、コンピテンシー、資質能力の開発に重きを置く教育者も存在する。私たちは、二者択一で考えておらず、いずれかの立場でもない。確かに、『何か』を学習することなしに、独自に『学び方』を概念化することは不可能である。本委員会は、二つの要素、一知識と発達—の双方が教育の過程で確実に提供されるように具体的な方策を提示したい。」*

*「最近、急速に変化するコンピューター時代やグローバル経済の到来とともに、『転移可能な知識やスキル』に基盤を置くカリキュラムが、影響力のある多くの団体、たとえば王立技芸協会（RSA）や『学習キャンペーン』によって提唱されてきている。この最近の動きについて、われわれは転移*

可能なスキルだけを教えることで十分であるという考え方には同意しないということをはっきりと述べておきたい、...すべての学習はスキルを含む内容を有しており、その内容は通常、確かに特定の具体的なもの（specific）である。汎用的なスキルや能力は重要ではあるけれども、そのまま単独で教えることはできない。こうしたスキルや能力は内容を伴う文脈で教えなければならない。」<sup>8</sup>

先述のようにナショナル・カリキュラムは、学校カリキュラムの50%くらいを想定しており、残りの50%は学校の裁量の中で決定されることになる。スキルをどう教えるかについては、学校が自分たちのエトスや哲学にしたがって決めればよいと考えている。というのも育成すべきスキルは教科によって違うので（例：クリティカル・シンキングというスキルは数学と歴史では違う）、獲得するスキルは、それを実際使うときにその教科の中で考えるべきであるとしている。

また、英語・数学・理科のみ詳細な内容を示す方向性にあるが、各学校が義務付けられている学校監査において、「幅広くバランスがとれているか」「スピリチュアル的、道徳的、社会的、文化的発達を促しているか」ということについて外部の専門監査官から評価を受けるので、各学校は英語・数学・理科のみに特化したカリキュラムにするわけにはいかない。

「幅広くバランスがとれているか」「スピリチュアル的、道徳的、社会的、文化的発達を促しているか」という問いに対して、イングランドでは、PSHE（人格的・社会的・健康的・経済的発達のための教育—注：経済的発達は中等のみ）があり、改訂前のナショナル・カリキュラムにおいても準必修という位置付けとなっていた。PSHEは、知識というよりもスキルの育成が中心となっている。新しいナショナル・カリキュラムにおいても、準必修とする位置付けは変わらないようであり、中央が詳細にその内容を決めるのではなく、各学校がその必要に応じて独自のプログラムを作りあげるものとするのが確認されている。現在その在り方の検討作業がナショナル・カリキュラムとは別に進められており、その行方が注目される。

### 3-3-4 会話言語とコンピューター科学の重視

改訂されるカリキュラムの中で注目すべき能力は、「会話言語（話し言葉）」と「コンピューター」である。

会話言語は、英語のみならず、ナショナル・カリキュラムの各教科の中で教えることが強調されている。「会話言語」については、その発達が認知発達や学習の到達度と大きく関係していることが指摘されていることから、新しいナショナル・カリキュラムでは、重要な地位を占めるとし、各教科において教えられるべきものとしている<sup>9</sup>。例えばイギリスでは(そしてアメリカも)、4、5歳の段階では書き言葉を学習しすぎているので、もっと、「話す」「討議する」「遊ぶ」をやってからでもよいという。

「コンピューター」については、それまでのナショナル・カリキュラム「情報通信技術」(ICT)という教科名からの変更となる模様である<sup>10</sup>。それまでの教科「情報通信技術」が、オフィス作業における情報機器の活用が中心となっていたことによる反省から、初等学校段階からアルゴリズムやプログラム言語の学習などコンピューター科学の学習を中心に進めるものである。

### 3-4 イギリスにおける「能力やスキル」に関する用語と定義

イギリスでは、産業界からの要請を受けたかたちで、学校において経済に必要なスキルを育成するという、いわゆる職業主義的なカリキュラム政策が取り込まれるようになって 30 年以上がたっている。その端緒ともいえるのは、イギリスの学校におけるカリキュラム改革のメルクマールとして、つとに引き合いに出される 1976 年のジェームス・キャラハン首相（当時）のラスキンカレッジにおける演説であった。同演説は、当時のイギリスが深刻な不況にあり、若者のための伝統的な労働市場が崩壊した中で、「仕事のための道具」(tools to job) を育成されることが雇用者たちから望まれているとした<sup>11</sup>。

その後、主に青少年の職業準備教育の進展の中、1983 年に「青少年職業訓練計画」(Y T S) によって示されたコア・スキル (core skills) のためのプログラムが示された。これは、青少年の〈適応性〉〈汎用性 versatility〉〈雇用可能性 employability〉を強化することをねらったものである。

コア・スキルという用語の使用は、その後 1980 年代から 1990 年代半ばまでも継続されたが、それまでがどちらかといえば義務教育段階で失敗をした生徒たちを念頭に置いた取組であったのに対して、義務教育段階修了である 16 歳以降のすべての生徒を対象とした、いわば普通教育と職業教育をすべて念頭におくことを目指した取り組みに変わった。1989 年の時点で構想されたコア・スキルは、〈コミュニケーション〉〈計算力〉〈情報技術〉〈個人的スキル〉〈問題解決〉〈現代外国語〉であった。それらが直ちに普通教育分野で取り入れられることはなかったが、職業教育の分野では一部修正のうえ評価と結びついた形で、すなわち「一般全国職業資格」(GNVQ) の「コア・スキル」単位として、導入された。

コア・スキルは、その後キー・スキル (key skills) と名称を変え、1997 年の総選挙の結果交代した労働党政権下においては、それらを大学進学のための学問的資格試験受験者を含めたすべての 16 歳以上の生徒が獲得するべきものとして導入が模索された。

またキー・スキルは、2000 年からは義務教育段階においても、すべての年齢段階でナショナル・カリキュラム全体を通して育成されるべきものとして提示された。それらは、「学習者が学校・仕事・人生において、自身の学習や行動を向上させる手助けとなるスキル」と定義している。その要素は、キー・スキルとしてすでに設定されていたものと変更なく、〈コミュニケーション〉〈数字の活用〉〈情報技術〉〈他者との協働〉〈自分の学習と成績の向上〉〈問題解決〉である。

さらに 2000 年からのナショナル・カリキュラムでは、キー・スキルを補完するものとして「思考スキル」(thinking skills) が示された。このスキルを使うことにより子どもたちは「何を学ぶか」と同時に「どのように学ぶか」すなわち「学び方を学ぶ」ということに焦点を当てることができることになる。思考スキルの中身は、〈情報処理スキル〉〈推論スキル〉〈探究スキル〉〈創造的思考スキル〉〈評価スキル〉で構成されている。

中等学校では、2007 年にナショナル・カリキュラムの全面改訂を行ったが、そこでは「機能的スキル」(functional skills) という用語が用いられている。ここでの機能的スキルとは、子どもたちが人生や生活している社会や職業において、自信を持ち、効果を上げ、独立して発揮させることが望まれるスキルと能力となる英語・数学・情報通信技術に関する中核的要素を指している。ナショナル・カリキュラムの上記 3 教科の学習プログラムには、それらの教科において、この機能的スキルをど

う育成するかを示している。さらに機能的スキルは、ナショナル・カリキュラムのその他の教科においても、学習プログラムの「中核過程」という項目に同スキルの育成について陳述している。

スキルの育成に関しては、16歳時に受ける外部試験の一つに（GCSE試験とは別）「キー・スキル」という科目が加わったことにより、そのための学習評価の仕組みが出来上がったといえる。これは、多肢選択問題と学期間中の学習の評価を行う根拠となるポートフォリオとの二つで評価をするものである。後に「機能的スキル」が加わったが、現在では「機能的スキル」が「キー・スキル」にとって代わる模様である。いずれも職業教育の一環と捉えられている。

また、上述のようにスキルの育成を重視するP S H Eは、例えば中等学校では、個人の幸福（ウェルビーイング）に関係するものとして〈クリティカルな反省〉〈意思決定とリスク管理〉〈人間関係の構築と他者との協働〉、であり、経済的幸福（ウェルビーイング）に関係するものとしては、〈自己発達〉〈探究〉〈起業〉〈財政的能力〉の育成を目指したものである。

現政権は、2007年版のナショナル・カリキュラムは各教科においてや教科を横断して育成するスキルについて詳細に規定しすぎたと考えている<sup>12</sup>。それは各学校で決めればよいと考えているためか、今次の改訂案の文書では、全体を説明する部分ではスキルという用語を直接に用いてはいない。それらは、後述のように各教科の学習プログラム内に示されている目標や教科内容の中に散見される。

### 3-5 新しいナショナル・カリキュラムにおける「能力やスキル」

#### 3-5-1 重視して育成しようとしている特色ある能力やスキル

現政権が改訂しようとしているナショナル・カリキュラムでは、英語・数学・理科を特に重視し、それらの学習プログラムは、それぞれ40-50頁の詳細なものとなっている。他の教科が2-5頁であることからその扱いの違いがわかる。育成するスキルは、その教科の中に組み込まれて提示されると説明されている。

例えば算数/数学の場合では、教科全体の目標の一部に、〈数学的な推論〉〈問題解決力〉があげられている。キーステージ3（第7～9学年）でいえば、教科内容の学習を通して、測定や幾何の問題に取り組む際や比例関係を代数的に説明する際に割合や比例の知識をつかって答えを出すような〈数学的な推論〉や、金融における数学の利用など数学内外での問題を解決する正規の数学的知識の活用能力を発達させる〈問題解決力〉を育成するとしている。理科の場合は、教科全体の目標の一部に〈確率を使うこと〉〈統計を使うこと〉〈科学的に取り組むこと〉が挙げられている。キーステージ3（第7～9学年）でいえば、〈科学的に取り組むこと〉の中身として、「実験スキル」「情報の処理と問題解決」「測定」をあげている。その他で特徴的なものとしては、「会話言語（話し言葉）」（spoken language）「コンピューター」（computing）がある。

「会話言語」については、その発達が認知発達や学習の到達度と大きく関係していることが指摘されているとし、新しいナショナル・カリキュラムでは、重要な地位を占めるもので、各教科において教えられるべきものとしている<sup>13</sup>。ナショナル・カリキュラムのこれまでの版では、このことは、それほど強調されていなかったのである。例えば算数/数学でいえば、数学的語彙の発達や数学的

当化を示すために重要である。理科でいえば、自分自身や他者の思考を明確にするために重要であるとしている。

「コンピューター」については、新しいナショナル・カリキュラムでは新たな教科として提案されているものであるが、それまでのナショナル・カリキュラムの「情報通信技術」という教科名からの変更となる模様である。内容としては、デジタル・システムの働き、設計、プログラム言語など情報やコンピューターの基本的原理を学ぶという、いわばコンピューター科学の基本を初等学校から中等学校までを通して学ぶというものである。それまでの「情報通信技術」が情報機器の活用が中心であったものからの大きな変更といえる。

### 3-5-2 「能力やスキル」が重視されている社会的・文化的背景、「能力やスキル」の根拠

#### (1) 英語、数学、理科の知識

英語・数学・理科が重視されている背景には、現政権が PISA テストの結果を「初めて真剣に取り上げたこと」があげられる<sup>14</sup>。今回のナショナル・カリキュラムの改訂作業では、PISA の上位国のカリキュラムから学ぶという姿勢を前面に出している。また知識を重視しているのは、教育社会学者であるロンドン大学のマイケル・F・D・ヤング教授の提唱した「強い影響力のある (powerful)」知識を与えることを大切にするという考え方に基づいている<sup>15</sup>。またこれは、アメリカの英文学者であり文芸評論家の E・D・ハーシュの提案する「文化的リテラシー」の概念に影響を受けたともいわれる。これは学生の読解力は文章の難易度よりも文中に出てくる事項についての知識が影響しているという事実から生み出された概念であり、このことから「核となる知識」が、考えるスキルや批判的な思考の基礎を形成するものであると論じられている<sup>16</sup>。

#### (2) 「会話言語 (話し言葉)」

会話言語を重視する理由として、三つを挙げている<sup>17</sup>。一つは、会話言語の発達が数学なども含め、学力達成一般に貢献すると考えていることである。二つ目は、そもそも新しいカリキュラムが、カリキュラムの幅をこれまでよりも狭めて学力の達成度を上げようとするならば、何よりも言語やコミュニケーションのスキルを向上させることに専心するべきである、としている。三つめは、会話言語というものは、言葉を読むスキルや読解と分かちがたい関係にあることである。これは、音韻意識、会話の語彙、構文的知識の発達を通して実現するものであるが、それは、就学前の段階やキーステージ 1 (第 1~2 学年) の段階だけでは十分ではないためである。

#### (3) 「コンピューター」

ビデオゲーム・特撮産業は、イギリスが世界で優位を保ってきたものであるが、それに陰りが見えてきたのは、イギリスの学校教育における ICT 教育が、コンピューター科学やプログラミングスキルよりもオフィス仕事に必要なスキルに偏ったためであるとし、世界における競争に勝つには、こうした教育を充実させるべきであるという考え方による<sup>18</sup>。

### 3-5-3 「能力やスキル」の位置付け

現在提案されているナショナル・カリキュラムの構造は表 1 のようである<sup>19</sup>。これらが学校カリキュラムのすべてではなく、これまでに述べたようにそれら学校カリキュラムの一部 (約 50%) であ



り、残りは各学校の裁量で決めることができるようにしている（図1）。重視している英語・算数／数学・理科は、これまでと同様中核教科としている。会話言語については英語だけでなく、各教科の中で教えられるものとしている。コンピューターはそれまでの情報通信技術からの教科名変更が提案されている。

表1 提案された新しいナショナル・カリキュラムの構造

	キーステージ1	キーステージ2	キーステージ3	キーステージ4
年齢	5 - 7	7 - 11	11 - 14	14 - 16
学年	1 - 2	3 - 6	7 - 9	10 - 11
中核教科				
英語	✓	✓	✓	✓
算数／数学	✓	✓	✓	✓
科学	✓	✓	✓	✓
その他の基礎教科				
美術とデザイン	✓	✓	✓	
シティズンシップ			✓	✓
コンピューター*	✓	✓	✓	✓
デザインと技術	✓	✓	✓	
外国語／近代外国語**		✓	✓	
地理	✓	✓	✓	
歴史	✓	✓	✓	
音楽	✓	✓	✓	
体育	✓	✓	✓	✓

\*情報通信技術（ICT）」から「コンピューター（Computing）」への教科名の変更については、公開協議の結果に左右される。

\*\*教科名は、キーステージ2では「外国語」、キーステージ3では「近代外国語」となる。

出典：Department for Education、The National Curriculum in England Framework document for consultation、February 2013. p.7 Figure1

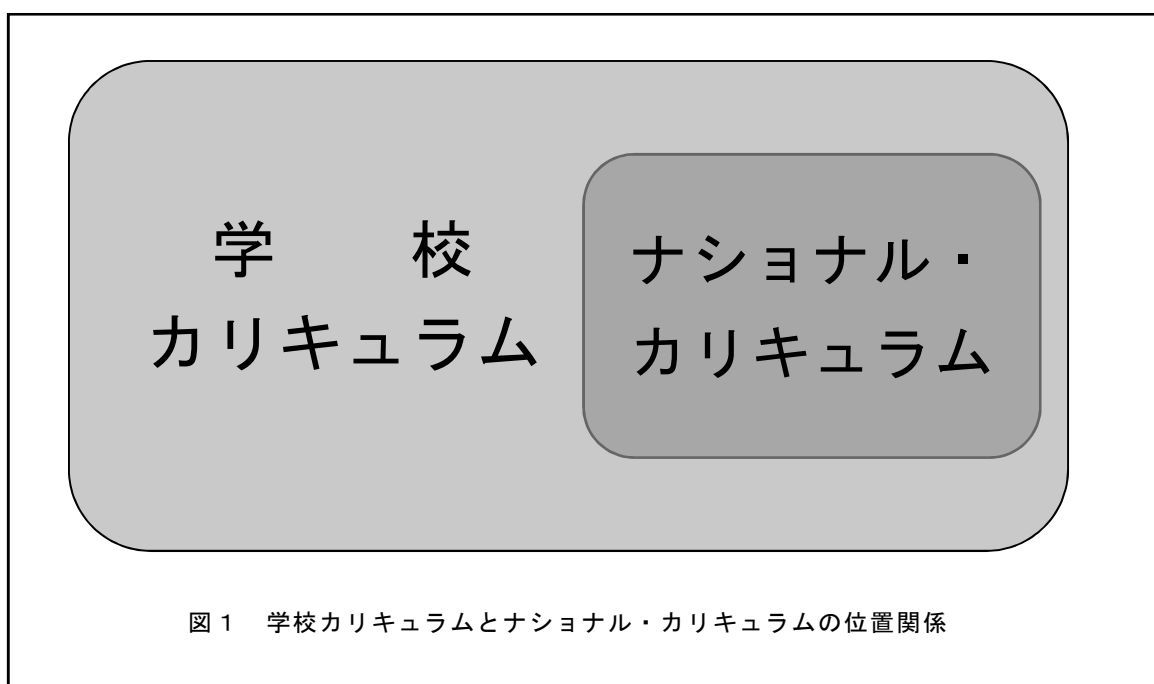


図1 学校カリキュラムとナショナル・カリキュラムの位置関係

なお、ナショナル・カリキュラム以外の義務として、初等・中等両段階の宗教教育と中等段階での性教育がある。また、先の PSHE は初等中等の両段階で必修に準じた扱いとなっている。改訂前のナショナル・カリキュラムのように、育成するスキルは教科と別に掲げられているのではなく、各教科の中で学習する知識と結びつけた形で示されている。また、個人の人格や社会性の発達を目指した P S H E はナショナル・カリキュラムの必修とはならず、前回に引き続き準必修との扱いであった。

### 3-5-4 教科の存立基盤と「能力やスキル」との関係

イギリスではナショナル・カリキュラムの教科の枠組みと実際の学校における授業での展開のありようは、これまでは必ずしも一致するものではなかった。このことは、初等学校の時間割をみることで理解できる。表 2 は、2012 年 9 月の時点での初等学校（サリー県 レザーヘッド・トリニティー校）第 6 学年の時間割の例であるが、この枠組みは、ナショナル・カリキュラムの教科のそれをそのまま踏襲しているわけではない<sup>20</sup>。「ヌメラシー」は算数、リテラシーは英語に対応するが、ほかに「トピック」「サークルタイム」「ゴールデンタイム」などの時間がある。いくつかの教科の内容がここで学習されるが、そこでは教科内容とともに、〈コミュニケーション〉や〈情報技術〉などこれまでキー・スキルと称された能力や〈情報処理スキル〉〈推論スキル〉〈探究スキル〉〈創造的思考スキル〉〈評価スキル〉などの思考スキルなどが育成される場となっている。

表 2 サリー県 レザーヘッド・トリニティー校 6 学年の時間割

	8:55-9:05	9:05-9:20	9:20-10:20	10:20-10:35	10:35-11:35	11:35-11:55	11:55-12:05	12:05-1:00	1:00-1:05	1:05-3:00		3:00-3:20
月	登録 (出席確認)	集会	体育	休み時間	フランス語	ガイド テッド・ リー ディング	ハンド ・ ライ ティ ング	昼 食	登録 (出席確認)	ヌメラシー	リテラシー	物語
火			ヌメラシー		リテラシー					トピック	体育	
水			ヌメラシー		リテラシー					宗教教育/美術		物語
木			ヌメラシー		リテラシー					トピック	PSHE	物語
金			ヌメラシー		リテラシー					サークル・タイム ゴールデンタイム	ICT	物語

このことは、中等学校にもあてはまる。例えばキーステージ 3（第 7-9 学年）の段階で「ドラマ」という教科を全生徒必修にしている学校があるが、ナショナル・カリキュラムの中に同教科はない。イギリスの学校における教科「ドラマ」は、演劇教育のメソッドを使ってコミュニケーション能力、他者との協働、創造的思考など様々なことを学ぶ授業である。

すなわち育成する「能力やスキル」によっては、ナショナル・カリキュラムで定められた教科がそのまま実践される教科の枠組みとして扱われるのではない。

このようなことが新しいナショナル・カリキュラムの枠組みにおいてはどうか変化するであろうか。これまでも述べたように、新しいナショナル・カリキュラムでは、育成するスキルは教科との関係

で考えるべきとされている。したがって、これまでよりも教科の枠に縛られた形での実践になるのか、あるいは、学校裁量の幅が広がることから、これまで以上に自由な枠で展開されるのか、今後の動きを注視する必要がある。

### 3-5-5 「能力やスキル」を育成するための方法

#### (1) 教育方法の工夫によるスキルの育成

これまで強調されてきたキー・スキル、思考スキル、機能的スキルなど教科を横断した形での「能力やスキル」は、その教育方法の工夫によって育成されてきたといえる。このことは、前述のように新しいナショナル・カリキュラムの体制下でも否定されているわけではない。問題にしているのは、改訂前のナショナル・カリキュラム（特に中等学校の 2007 年版ナショナル・カリキュラム）では、そうした方法を規定するものをナショナル・カリキュラムの学習プログラムに入れ過ぎたことから、現場の教師たちの創造性が損なわれたことである。したがって、新しいナショナル・カリキュラムでは、そのことは示さずに、学校や教師の自律性や創造性に委ねるとしている。

#### (2) 会話言語を育てる授業

会話言語は、英語の教科のみならず、あらゆる教科の中で育成されるべきものとなっている。一例として、以下にロンドンの中高等学校 2 年（第 8 学年）の「宗教教育」の授業の事例を示す<sup>21</sup>。これは〈ユダヤ教の学習〉の単元で、アンネ・フランクについて学習するが、学習目標は、1) アンネ・フランクの人生とホロコーストにおける体験について吟味する、2) ホロコーストについての知識を活用して共感できるようにする、の二つである。ここでは、二人組で話し合う、あるいは皆の前で発表するなど授業方法の様々な工夫により「会話言語」を育てる授業となっている。話す前には、文章やマインドマップに書くなど、自分の考えをまとめる工夫がある。

教科の知識を教える中でも、このような会話言語の育成を促す工夫は、イギリスの宗教教育の授業では常にみられる光景であるが、新しいナショナル・カリキュラムの体制下では、そのことはさらに強調されることが見通される。

## 授業の実例例：第8学年 ユダヤ教「アンネ・フランク」

授業日：2011年12月8日1時限目

学習目標：

- ・アンネ・フランクの人生とホロコーストにおける体験について吟味する。
- ・ホロコーストについての知識を活用して、共感できるようにする。

授業の流れ：

- ① 導入：生徒は、アンネ・フランクについて知っていることをマインドマップに書く。
- ② スライドにより、ホロコーストの説明をする。
  - ・指名された生徒がスライドの説明文を読み上げる。
- ③ スライドにより、ホロコーストの写真を見る。
  - ・指名された何人かの生徒がその写真を見て感じたことを発表する。
- ④ 「秘密の屋根裏部屋」というアンネ・フランクの生活を描いたビデオを見る。
  - ・視聴後、生徒は、アンネやその他の人たちが屋根裏部屋に隠れていて、どのような気持であったと考えるかを説明する文章やイラストを書く。
- ⑤ 二人の生徒が全員の前で発表した。
  - ・この二人は、エヴァ・シュロツ（アンネ・フランクの義姉）に会ったことがあり、エヴァの体験について皆に話した。
- ⑥ 教師が、アンネの日記の1942年6月20日の一部を朗読した。
- ⑦ 生徒は、教師が朗読した日記の内容から、アンネ・フランクやユダヤ人たちの生活がどのようになってしまっていたかをマインドマップにし、その後二人組になって、学んだことを話し合う。
  - ・何人かが皆の前で発表した。
- ⑧ ランダムに指名された生徒が、中央の先生の席に座り、アンネ・フランクのようになったらどのような想像するかを想像する。また他の生徒から質問を受ける。
- ⑨ まとめ：授業の最初に書いたアンネ・フランクについて知っていることを書いたマインドマップに、違う色のペンで、新しく知った事を書きくわえる。
- ⑩ 生徒は、本日の学習目標に到達したら親指を上げ、ふつつなら横、到達していなければ、親指を下に下げる。

### （3）コンピューター科学の学び方

情報通信技術の学習については、前労働党政権下で学校におけるコンピューターの利用が進んだことから、「情報通信技術」の教科だけでなく、あらゆる教科において、授業の中で展開されることとなった。こうしたことにより生徒たちは文書作成、表計算、プレゼンテーションなどのICT利用技術については十分育成されている。現政権が導入しようとしているのは初等学校段階からのコンピューター科学の学習であり、その具体的な姿はまた明らかになっていないが、年齢の低い段階から、プログラミング言語を実際に学ぶ授業が構想されているようである。

（新井 浅浩、藤井 泰）

【注】

<sup>1</sup> Department for Education, *The National Curriculum in England Framework document for consultation*, February 2013a.  
<https://media.education.gov.uk/assets/files/pdf/n/national%20curriculum%20consultation%20-%20framework%20document.pdf>, accessed 17 February 2013.

<sup>2</sup> Department for Education, *Reforming Key Stage 4 qualifications consultation Government response*, February 2013b, accessed 17 February 2013.

<sup>3</sup> ナショナル・カリキュラム見直しの動きについては以下を参照されたい。

藤井泰「イギリスにおける連立政権によるナショナルカリキュラムの見直しの動き—『ナショナルカリキュラムの枠組み』(2011年)を中心に—」『松山大学論集』第24巻第6号、2013年。

<sup>4</sup> 2011年教育法20条により、大臣はイングランドの公費で維持運営されている学校に対して、国際比較調査への参加を要求できるようになった。

<sup>5</sup> ナショナル・カリキュラム改訂の専門委員会の座長 Tim Oates 氏へのインタビューに基づく。(2012年9月20日)。

<sup>6</sup> 2012年学校情報規則

<sup>7</sup> 注6に同じ。

<sup>8</sup> Department for Education, *The Framework for the National Curriculum-A report by the Expert Panel for the National Curriculum review*, December 2011, pp.11-12 および p.15.

<sup>9</sup> Department for Education, *The Framework for the National Curriculum-A report by the Expert Panel for the National Curriculum review*, December 2011, p.52.

<sup>10</sup> Department for Education, 2013a, *Op. cit.*, p.7 および p.152.

<sup>11</sup> Geoff Hayward & Rosa M. Fernandez, "From core skills to key skills: fast forward or back to the future?", *Oxford Review of Education*, Vol. 30, No. 1, March 2004.

<sup>12</sup> 教育省 ナショナル・カリキュラム改訂課 課長補佐 Stefano Pozzi 氏へのインタビューに基づく。(2012年9月17日)。

<sup>13</sup> Department for Education, 2013a, *Op. cit.*, p.10.

<sup>14</sup> 藤井泰「イギリスにおける PISA の教育政策へのインパクトの検討」『松山大学論集』第23巻第5号、2011年。

<sup>15</sup> Department for Education, 2011, *Op. cit.*, p.11.

<sup>16</sup> 佐々木毅「教育課程の編成にかかる注目すべき話題—改訂作業の目指す方向とその特徴」『諸外国における教育課程の基準—近年の動向を踏まえて—』(教育課程の編成に関する基礎的研究報告書4：研究代表者：勝野頼彦) 国立教育政策研究所、2013年3月、66頁。

<sup>17</sup> *Ibid.*, p.52.

<sup>18</sup> Ian Livingstone & Alex Hope, *Next Gen: Transforming the UK into the world's leading talent hub for the video games and visual effects industries*. NESTA, February 2011.

<http://www.nesta.org.uk/library/documents/NextGenv32.pdf>, accessed 17 February 2013.

<sup>19</sup> Department for Education, 2013a, *Op. cit.*, p.7 Figure1 より作成。

<sup>20</sup> 本研究海外調査により 2012年9月19日に同校を訪問した際に入手したデータである。

<sup>21</sup> 科学研究費補助金(基盤研究(C))「英国の学校における人格・価値教育の実施状況に関する研究」(研究代表者：新井浅浩、研究分担者：藤森裕治、研究課題番号：22531027)により、筆者(新井)および藤森裕治信州大学教授が2011年12月8日にヒリンドン・ロンドンバラにあるビショップ・ラムゼイ国教会中等学校で行った授業観察に基づく。

付記：2014年からの新しいナショナル・カリキュラムは、草案に対する二度のコンサルテーションを経て、2013年9月に最終案が出されたが、本稿で示したとおりの枠組みですすめられることとなった(Department for Education, *The National Curriculum in England Framework document*, September 2013c)。

---